

寒冷地栽培の原点「赤毛米」

札幌日大高生が収穫、脱穀

昭和初期の農具で体験



収穫した赤毛米を昭和初期の農具で脱穀する札幌日大の生徒たち

【北広島】「寒冷稲作の祖」と呼ばれる中山久蔵が明治初期に栽培に成功した赤毛米の田植えを今年初めて行った札幌日大高（虹ヶ丘）の生徒8人が3日、収穫した赤毛米を市東記念館の郷土資料収蔵室で、昭和初期の農具を使って脱穀した。生徒たちは「昔の農家の人たちの苦労も分かり、赤毛米に愛着がわいた」と話していた。（森畑竜二）

市内で広がる中山氏の功績の再評価の動きを受け、同高の松崎祥一教頭の呼び掛けで5月、生徒たちは同校付近の田んぼ約120平方メートルに赤毛米を植えた。

地元農家の協力で赤毛米は順調に生育。9月上旬、生徒たちはかまで稲刈りを行った後、収穫した稲穂を天日干しして乾燥させていた。

3日は収蔵室にある足踏み式脱穀機を利用。生徒たちは、踏み板を踏んで歯の部分回転させ、実を払い落とし、その後、わらくずを取り除く農具を利用し、約20kgの実を選別して取り出した。1年の三上義人さん（16）は「体力的にもきつい作業だったけど、脱穀までして貴重な体験になった」と話していた。

この実は精米し、生徒たちはおにぎりにして食べる予定。また、一部は8日に市芸術文化ホールで開かれる中山氏のフォーラム終了後の交流会（参加費500円）で試食される。